

1955年(昭和30)の広島市街の航空写真

古川 修文*

Aerial Photographs of Hiroshima City, 1955(Showa30)

Nobuhisa FURUKAWA

1 序 文

令和4年(2022)6月5日、岡山の佐藤家を訪問した折、佐藤家から新たに見つかった佐藤先生(以下敬称略)の遺品の手紙や写真、設計途中の資料などを見せて戴いた。その中に吉田鉄郎氏からの手紙と封筒に入った写真があった。吉田氏は佐藤の通信省時代の先輩で、建築界で「通信建築」と呼ばれて評価された郵便局や病院などを設計した人であり、佐藤と長く親交のあった方である。終戦後、佐藤も吉田氏も通信省を退官し、佐藤は設計事務所の開設を経て広島大学の教員の道に進み、吉田氏は教職の道から設計事務所へ進んで似た人生を歩んだ人である。本稿の主題である昭和30年当時は佐藤は広島大学建築学科助教授であり、吉田氏は東京に住んで、教職と建築設計をする傍ら、ドイツに関わる仕事をしていたようである。

さて、吉田氏からの手紙にはドイツ語の公文書が一枚と、都市の航空写真18枚が入っていた。公文書の日付は1955年12月15日となっていたから写真を発見した年から67年前の昭和30年(1955)の手紙である。写真を見ると18枚全ての裏に佐藤の名前と撮影年月日1955年7月1日の日付、主要な位置の記録があり、広島上空からの航空写真であることが分かった。戦後10年たった広島復興を記録した写真と知って驚いた。佐藤が戦後の広島市街を飛行機に乗って撮影したものであり、飛行機は複葉機である。これは低空を低速で飛べるプロペラ機であり、この小型機に乗ること自体勇気があることであるが、通信省時代

航空局技師として飛び回っていたので、平気だったのであろう。佐藤はこのとき44歳、揺れる飛行機に乗って広島上空から写真を撮り続けたのである。ただ、その経緯についての資料は全くなく、これに関する写真も佐藤家が保管するものだけである(2022年現在)。写真は佐藤家の許可を得て借用し、複写して本学会アーカイブ委員会の保管に追加した。本稿はこの写真をもとに当時の日本の復興と新たに発生した水爆への悲憤に対して、佐藤が世界に何を発信したかったのか、推測ではあるが考えてみたいのである。

まづ、事の始まりがドイツからの手紙によって1955年9月16日～10月20日までミュンヘンで開催された「食と住文化の国際見本市」であることを知った。日本の「食と住文化」は世界に誇るべきものを持っているが、当時の日本は戦後の復興に取り組んでいるときであり、このテーマで出展する余裕はない。ただ、この中の企画の一つに国際写真展があることに着目した。吉田氏は佐藤に働きかけて戦後復興の様子を世界に発表しようと出展を誘ったのである。ドイツも日本と同じく戦災からの復興に努めているときであった。写真ならばたいした費用も準備時間もかからない。しかも世界で唯一の被爆都市広島、長崎を対象にした復興は訴えるものが大きいと佐藤は思った。そのとき佐藤は思いがけない衝撃に気がついた。今、日本は新たな水爆という核兵器に直面しているのだ。原爆だけではない水爆という兵器が再び日本人を犠牲にしたのである。日本中が新

たな恐怖と悲しみのど真ん中にいた。

それは去年(1954)3月、悪夢のようなニュースが報じられたことから始まる。新聞の見出しに「邦人漁夫ビキニ原爆実験に遭遇」、小見出しに「水爆か」というものであった(読売新聞)。続報によると3月1日、アメリカのマーシャル諸島のビキニ環礁で行った水爆実験で、静岡県焼津市のマグロ漁船「第五福竜丸」が放射能を帯びたサングルの「死の灰」を浴び、乗組員23人が被爆した。焼津港に戻り、検査の結果乗員23人の放射線障害が判明したという。その後、懸命の治療もむなしく、無線長だった久保山愛吉さんが9月23日に40歳でなくなった。

被爆当時、ビキニ環礁付近では日本の漁船が数百隻近く操業していたが、他の漁船に異常が起きなかったのは稀有なことであった。ただ、米国人を含めた現地の住民が相当数放射線障害を受けていたことは後から知ったことである。水爆実験は6回にわたって行われたという。悪魔の使いのような原子爆弾を「ノーモア Hiroshimas」のスローガンのもとに原爆禁止を世界に訴えていた日本国民は、原爆の数倍の威力を持つ水爆という新たな核兵器に世界が取り組んでいることを知って怒りと悲しみに打ちひしがれた。日本国民はそれまでの原爆禁止から原水爆禁止に拡がり、1955年9月19日、原水爆禁止日本協議会(原水協)が全国組織で設立された。昭和30年という年は、世界が核兵器に向けて競争が激化する入り口であった。しかも世界はまだ新しい水爆という核の認識をそれほど持っているわけではない。その中で日本人が水爆の被害にあっている。これに対する日本人の怒りと悲しみを写真展に込めたかった。

佐藤はこれに気づき、原水爆の禁止を世界に発信したいと吉田に提案した。吉田もその案に賛成したが、当時の吉田と佐藤の立場では核の問題に触れることは出来なかったかもしれない。声高に水爆の名称は使えなかったであろう。結果として復興の全体を一目でわかる航空写真を撮ることにし、飛行機をチャーターして広島上空を基盤目のように取ってい

く。撮影はプロに頼むのではなく、佐藤が飛行機に乗って佐藤の描いた構成のもとに進めていく。飛行時間は最小単位とし、フィルムも1本とした。撮影日は空が一番安定する時期を選んで7月1日とした。この辺りまでは佐藤が残したメモなどで想像がつくが、飛行機のチャーターや費用、どこに会社に依頼したか、関係機関への届と許可など、誰が手続したか、その他諸々のことは一切不明である。この18枚の写真は佐藤が残したたくさんの写真の中でもっとも謎の多いものであるが、写真に平和記念公園の場面が多く残され、比治山の ABCC が特にクローズアップされたり、原爆炸裂の位置や爆心地、原爆ドームなどを示すコメントを写真に添付するなど、佐藤と吉田の真意が如実に表れている写真である。当時、世界が核開発の競争に突入したときであり、戦後の日本を広島の上空から撮影して世界の見本市に展示したことの意義は大きいといえる。

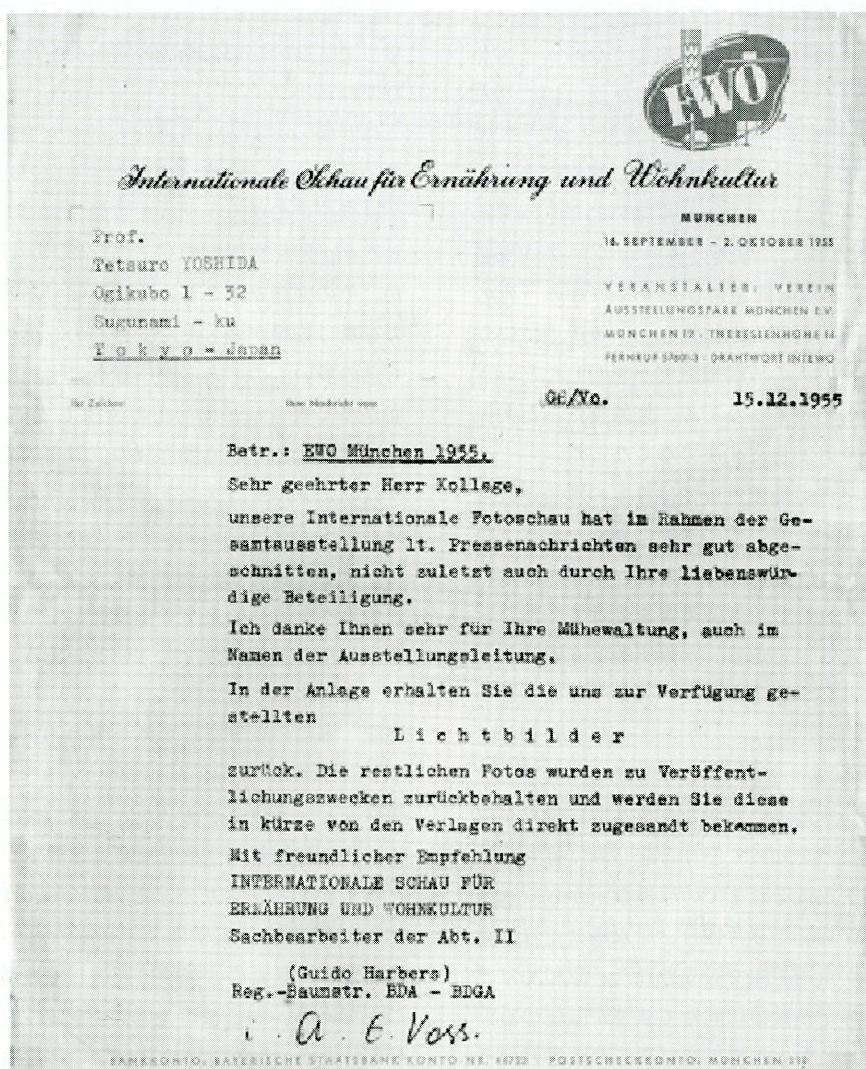
追記 本稿の執筆をしていた頃の2024年9月15日、テレビ番組の「NHK スペシャル」で「第四の被爆事件」という放送があった。日本の被爆は広島、長崎の後、1954年の「第五福竜丸事件」が第三の被爆と誰もが知っていたが、その四年後の1958年(昭和33年)7月3日、太平洋上で日本の海上保安庁の測量船がアメリカの核実験に遭遇して被爆したということである。24日後寄港して、乗員113人の検査が行われたが、異常は認められないと診断された。しかし、その1年後、一人の乗組員(名前は報道された)が急性骨髄性白血病を発症し死亡した。このことは初めて報道されたことだが、「第四の被爆」の真偽を明らかにするべき重要事項と考える。

本稿に掲載の写真などをご希望の方は下記に申し込んでください。無料で提供します。

日本民俗建築学会 アーカイブ委員会

執筆担当 古川修文

メール: syu-bunkan@jcom.zaq.ne.jp



宛先／日付 吉田鉄郎 教授 荻窪1-32 杉並区 東京・日本 1955年12月15日

件名：EWO ミュンヘン 1955

拝啓、先生 私たちの国際写真展は、総合展示会の一環として行われ、報道によると非常に高い評価を得ました。これはひとえに、先生のご親切なご協力のおかげです。展示会運営委員会を代表して、心より御礼申し上げます。添付資料として、先生からお預かりしたスライド写真を返却いたします。残りの写真については、出版目的のためにお預かりしておりますが、近日中に出版社から直接お送りする予定です。

敬具

差出人：食と住文化の国際展示会 第2部門 担当者（グイド・ハーバーズ）
公認建築士 BDA-BDGA （代筆 A. E. Voss）



1 広島城趾 城郭の北の角から南方全景を撮影。城郭の全景は分かるが、天守閣や当時あった大本営などの軍施設はことごとく消滅している。手前の一段高い矩形の石垣の上に天守閣があった。佐藤メモ：Old Castel (ruin), ruin of the main building. 1958年に天守閣などが復元された。



3 太田川河畔の縮景園(浅野泉邸) 手前の京橋川は左に流れた先で京橋川と猿猴川に分かれる。縮景園は日本庭園の姿が健在に残ったが、戦後池には沢山の被爆者の死体があったという。中央に広電白島線が南方に伸びる。縮景園の東にある広いグラウンドは幟町中学校、中央に並ぶグラウンドは広島女学校、幟町小学校。



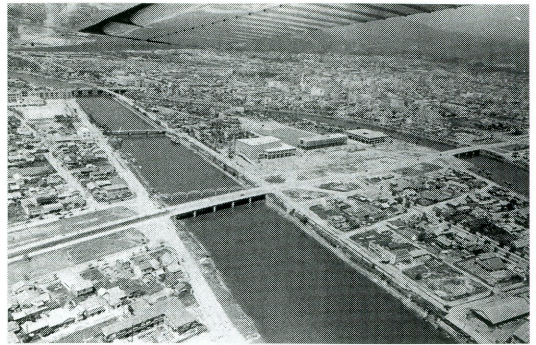
2 中区幟町上空から北方を撮影 右に京橋川、北に二葉山がせまる。中央の一段高い建物は世界平和記念聖堂で、村野藤吾設計、1950年8月6日着工、1954年8月6日竣工である。この写真は約1年後に撮影したもの。2006年4月21日重要文化財指定。所在地：中区幟町4-42。カトリック幟町教会。



4 金屋町上空から北方を撮影 本流の太田川が右に猿猴川、左に京橋川に分かれる。右上に広島駅、その北に二葉山が迫る。広島駅から南に延びる駅前通りは東西の道と交差し、右に曲がると紙屋町、相生通りに向かう。駅前通りを直進すると平和大通りと交差し、さらに進んで千田通りと合流する。市役所などがある。



5 元安川上空から西方を撮影 平和記念公園の全景が見えるが、北には多くの民家が残っている。この年の8月6日の平和記念式典は平和記念資料館や国際会議場など全ての建物が完成して、多くの人が集まったが、慰霊碑の後方には幔幕を張り巡らし、体裁を整えて行われた。左側の平和大通りも已斐近くまで伸びている。



7 本川上空から北東を撮影 中央の平和記念公園は三棟が完成しているが、公園北部には民家が多く残っている。全ての民家に移ったのは5年後である。100m平和大通りの南側は居住区域で復興が進んでいるのが見える。手前の西平和大橋の上流側に仮設橋が架かっているが、現在は無い。



6 紙屋町上空から西方を撮影 左下から上(西方)へ延びる大通りは比治山から已斐まで行く平和大通り(100mBLVD、Boule Vard)である。広島市は平和大通りによって北と南に分けられ、平和記念公園は写真5で分かるように平和大通りを基底にして垂直の軸線が北に延び、原爆ドームにつながる。(写真19参照)



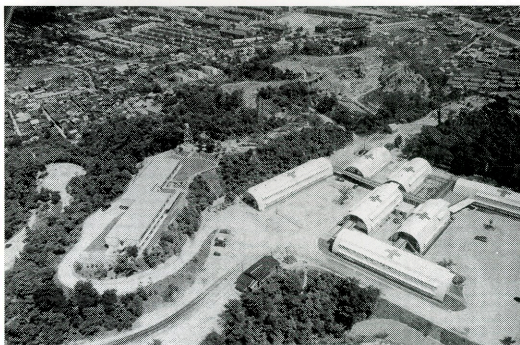
8 船入町上空より瀬戸内海を見る 左に本川、右に天満川、正面に瀬戸内海が広がり、かすかに厳島(右)が見える。この地域は昭和初期から区画され、居住地として形成されていたが、被爆で全域が壊滅した。復興10年、元の区画に沿ってここまで復興した。学校も残っている。先端の海の傍には小高い江波山と皿山がある。



9 京橋町上空から南方を見る 写真4と関連した写真である。左の大通りは広島駅から南下した道で、右に曲がって京橋川を渡り、紙屋町、相生通りへ向かう。この通りにはショッピングゾーンが計画され、現在はデパートや娯楽施設が並んでいる。左の比治山から西方に100m平和大通りが延びているのがかすかに見える。



11 平和大通り (BLVD) と紙屋町の上空から北を撮影 中央を南北に延びる鯉城通りとその左に元安川、平和記念公園がみえる。右上のグラウンドと校舎は被爆者の救助に使われた袋町小学校で、小学校の南側には頼山陽居室(史跡)が残る。中央の樹木のある地域は白神社が現存するが、今はホテルやテレビ局が建ち並ぶ。



10 比治山上空を撮影 比治山の北西部に、かまぼこ屋根に赤十字マークの原爆傷害調査委員会(U.S.A. ABCC、Atomic Bomb Casualty Commission)の建物が並ぶ。左の建物は職員用宿舎。原爆投下直後、被爆者の調査研究が開始され、1947年広島赤十字病院にABCCが開設。1950年11月比治山に移転した。



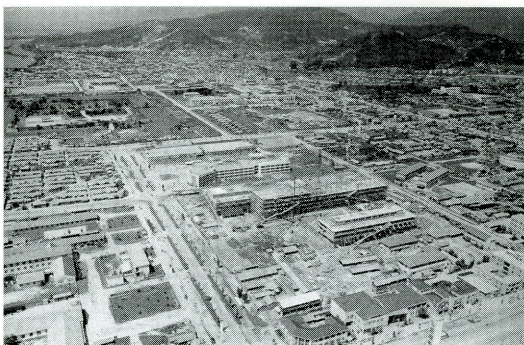
12 宇品地区上空から瀬戸内海を見る 左の山は仁保町、海上には江田島と似島が見える。宇品地区は比治山の南に当たる皆実地区とそこから海に向かって伸びる開発地区では道の造りが変わっていた。南の宇品港までの道は碁盤目に区切られている。宇品地区は全域に軍の施設が多く、中に高等学校や専門学校があった。



13 八丁堀上空から南方を見る 中央の大通りは白島通りで、現在は広島電鉄白島線が敷かれ八丁堀交差点で、広島電鉄本線と合流する。右側に建設中の県庁舎、その右上に平和記念公園が見える。左の翼の下に見える塔は広島世界平和記念聖堂、その右側は幟町小学校。県庁の下側(北)は工事中の広島合同庁舎である。



15 100m大通り(BLVD)上空から西方を見る 平和大通りが西(己斐)に延びている。元安川の向こうに平和記念公園が見える。平和大通りの左(南)には国泰寺高のグラウンドが見え、平和大通りの南側は住宅区域である。広い土地に見えるのは寺院と墓地である。大通りの北側は高いビルが建つ商業地域である。



14 紙屋町上空から北方を撮影 左上は広島城址、そこから南下する大通りは現在の鯉城通り、中央は建設中の広島県庁舎、その北側に市民病院、広島合同庁舎が並ぶ。右上には縮景園と二葉山が見える。鯉城の手前は集合住宅であるが現在は中央図書館と美術館である。鯉城の東は広島高等地方裁判所など官公庁が並ぶ。



16 平和記念公園と元安川と街並み 戦後はバラック住宅で雑然としていた河岸も今はきれいになって、両岸には樹木が植えられ遊歩道と車道が整理されている。中央に平和記念公園があって、それを囲んで整然とした街並みが築かれていく。この写真は平和都市新生の象徴として最も力強く、美しく感じられる一枚である。

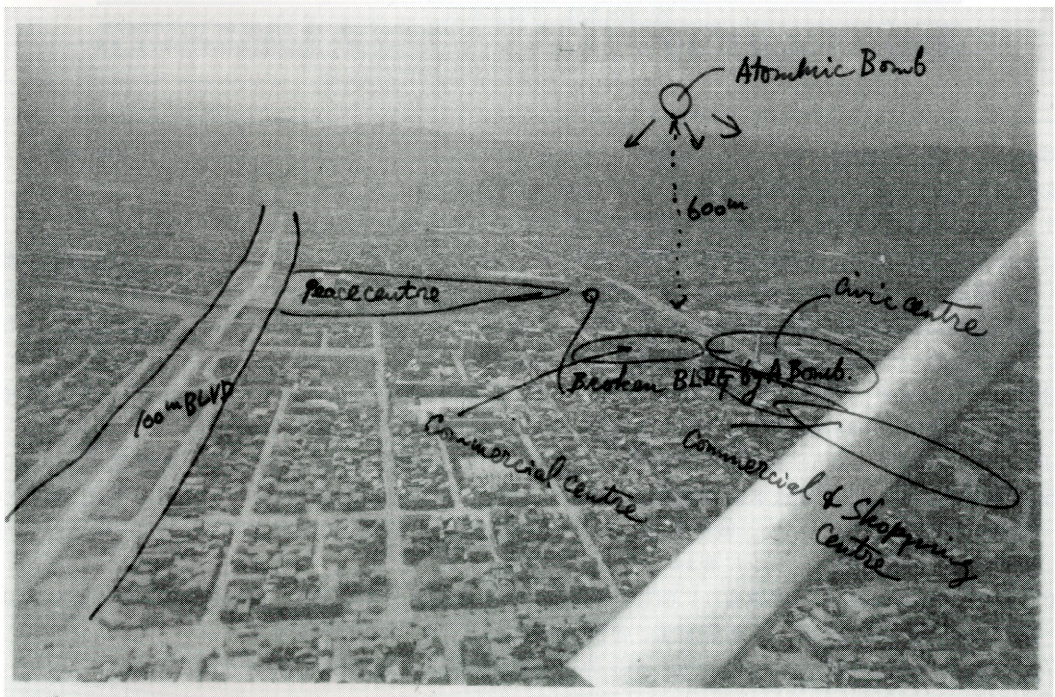


17 薬研堀上空から南方を撮影 薬研堀上空から南方を撮影。左の比治山から西方に100m大通りが伸びる。複葉(二枚の翼)をつなぐ支柱の右に鯉城通りが南に延び、被爆で残った旧日銀支店が見える。その上方の樹林帯は現在全日空ホテルなどのある市街地。支柱の左のグラウンドは平和資料館がある袋町小学校である。



18 BLVD の上空から西方を撮る 中央の川は天満川。100m大通りが西に向かって己斐直前の太田川放水路で止まっている。大通りの南(左)は Residential Zone、北(右)は Apartment House が計画されている(観音町辺り)。己斐橋は西国街道の西玄関として重要であったが、開通したのは5年後の1965年である。

写真19 写真6に被せたトレーシングペーパーの佐藤のコメント



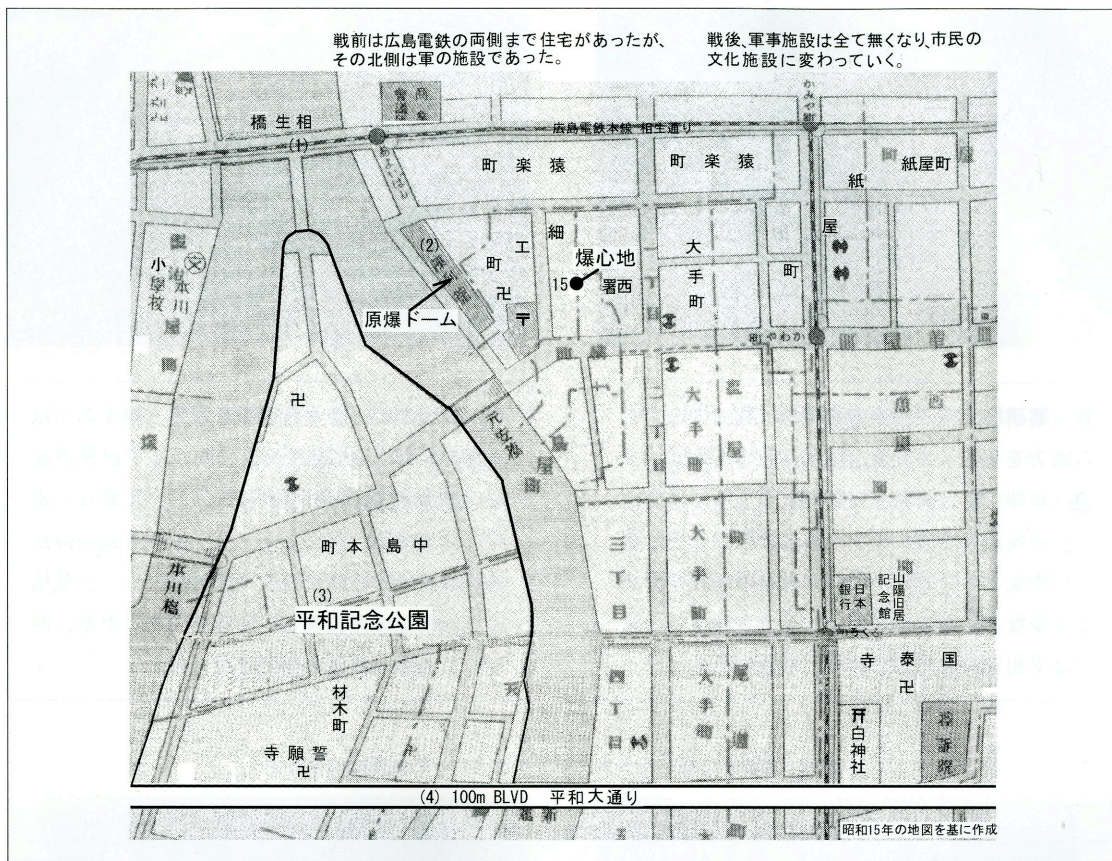


写真19 写真6の佐藤のコメント 佐藤は全ての写真にトレーシングペーパーを被せ、英文でコメントを書いていた。ここでは写真6上のコメントを紹介する。

1. Atomic Bomb 600m 原子爆弾の炸裂位置を示す。相生橋の上空600mといわれている。
2. Broken BLDG by Bomb 原爆で破壊されたビルを指すが、原爆ドームのことである。地上の爆心地の位置は商店と住宅が密集する細工町15番地あたりで、島病院の敷地だといわれている。そこから150mほど西に広島県産業奨励館(後の原爆ドーム)があった。被爆した木造建築の街並みは焼け野原になり、そこにただ一つ煉瓦造の産業奨励館がかろうじて残っていた。
3. Peace Center 広島平和記念公園である。公園の範囲は中島本町と産業奨励館のある細工町が含まれる。かつての中島本町は元安橋から本川橋に通じる西国街道があり昔から栄えた。
4. 100m BLVD 100m平和大通りの南側は住宅地の他に、市役所、学校、病院など大型施設が多い。
5. Civic Center 広島電鉄本線(相生通り)の北は戦前まで陸軍の施設のゾーンで、戦前の地図にはその詳細も載せない程であった。戦後解放されて、市民球場、体育館、図書館、バスセンターなどが計画され、文化の薫り高いゾーンに変わった。
6. Commercial Center 鯉川通りに面した中区紙屋町、大手町一体は銀行、保険会社が並び、相生通りの北の八丁堀は広島県庁、中央警察署、市民病院などの官庁、公共施設が並ぶ。
7. Commercial and Shopping Center 相生通りの南、紙屋町、中央通り、本通りなどである。